

## 「きけわだつみのこえ」

2014年4月30日

「東京新聞」は、4月29日の「昭和の日」に6面を費やし『きけわだつみのこえ』に関する特集記事を組んでいる。日本戦没学生の手記『きけわだつみのこえ』は幾度か改定しているが、何冊か読んだ。無念に死を受け入れざるを得ない学生たちの死の意味を必死に見出そうとする声には涙なくして読むことができない。

学徒兵・木村久夫氏の手記は特別に重要なものとして掲載されていた。多くは死に追いやられていく前の心情を綴ったものであるが、木村氏はB級戦犯として、1946年5月23日に処刑されている。戦後の事情を少し知っている訳である。木村氏の手記は、心酔し切って読んだ田邊元の『哲学通論』に鉛筆で「余白に書かれた手記」と言われていたが、手製の原稿用紙11枚に書かれた「もう一通の遺書」の全文が見つかった。『きけわだつみのこえ』には「余白に書かれた手記」と「もう一通の遺書」が混在しているらしい。誰かが編集したのであろう。

新聞に「もう一通の遺書」の全文が掲載され、「余白に書かれた手記」で削除されていた部分も紹介している。軍部や東条英機について厳しい批判が書かれている。「日本の軍人、ことに陸軍の軍人は、私たちの予測していた通り、やはり国を亡ぼしたやつであり、すべての虚飾を取り去れば、我欲そのもののほかは何ものでもなかった。「この（見るに堪えない）軍人を代表するものとして東条（英機）元首相がある。さらに彼の終戦において自殺（未遂）は何たることか、無責任なること甚だしい。これが日本軍人のすべてである」。

木村氏は、京都帝国大学経済学部に入學し、1942年に応召される。結核とみられる病気で入院するが、1943年にインド洋のカーコニバル島に配属される。激戦を生き延び、敗戦を迎え、捕虜となる。敗戦間際で起こった「スパイ事件」が木村氏の運命を変えた。多くの住民をスパイ容疑者として拘束し、過酷な取り調べの末、裁判抜きで80名以上を処刑にした。シンガポール戦犯裁判で、部下に拷問を強要し、裁判抜きで死刑にした参謀は無罪、中佐は懲役3年とされたが、取り調べに関与した末端の兵5人だけが拷問に関わったとして、死刑とされた。木村氏は、英文で真相の告発文を提出したが、認められなかった。死刑半時間前に「心なき風な吹きこそ沈みたるころの塵の立つぞ悲しき」と詠っている。優秀な学徒で、将来に大きな望みを持っていただけに、上官の仕打ちと、自分の悲運をどれだけ辛く、悲しく思っただろうか。

鹿兒島の知覧から「神風 特攻機」に乗って、海に散った若者たちの「遺書」も残されている。小泉純一郎元首相は「純粋な若者たちに感動した」と言っただけだが、その前に、彼らが無残な死へと追い込んだ権力者たちの横暴と社会構造の実態をしつかり検証することが先ではないか。戦死者の願いは、「二度と自分たちのような者を生み出すな」である。